

大嶋 彰 Oshima Akira



I 開催の経緯及び趣旨

本誌『美と育』を母体に設立3年目を迎えた「美術教育実践学会」の第5回研究発表大会が、平成12年7月8日（土）、9日（日）の二日間にわたって新潟県東頸城郡松之山町「自然休養村管理センター」で開催された。

今回、松之山町で開催されることとなった経緯は、同町を含む越後妻有地方6市町村が協働して行う大規模な国際美術展「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2000」が、同年7月20日より開催されることを勧告し、その参加作家でもある川俣正氏を中心にシンポジウムを企画したことによって、開催にふさわしい場所として決定された。また、川俣氏の制作現場が松之山町でもあることから、大会二日目には、川俣氏の制作現場のボランティアや、他の作家の制作現場を見学するツアーも企画し、名実ともに実践的な、しかも時宜を得たプログラムとなった。

大会プログラムの核となるシンポジウムの企画にあたっては、このトリエンナーレの在り方が本学会の趣旨とも重要な問題を共有していると考えられたことがあげられる。すでに周知のように、このトリエンナーレはこれまでの都市型の国際展とは決定的に異なったところから出発している。近代的な「美術」というフレームが大きく疑問視され始めた今日にあって、過疎に悩む雪国を舞台に、地域住民を巻き込んでの全く新しい参加型美術展として内外の注目をあびているのも、単にもの珍しいイベントであることを超えて、現在のさまざまな問題を映し出しているからにほかならない。

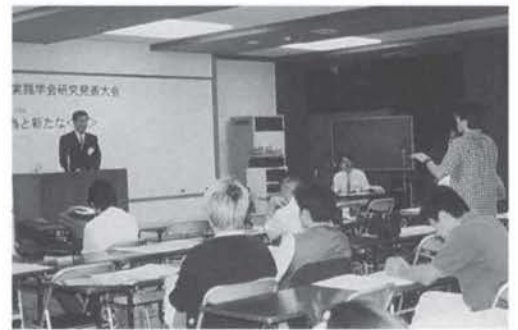
もちろんそれは、今日の教育の問題にも深くつながってくることは明らかであろう。たとえば、子どもの学習やさまざまな活動が、学校という制度性の中ではとすると結果や到達目標といった自明化された「意味」に拘束され、その都度ごとの実践的、対話的なくいま・こ

こ>が隠されてしまっていることと同根の問題が見いだされる。近代が作り上げてきた「美術」の制度性は、もはや、疑いなくその臨界点に達しており、子どもを取り巻く「学校」の制度性と同様に、深い混迷と閉塞感に覆われているのが現在の紛れもない事実とっていいのではないだろうか。このような状況を多くの人々が少なからず感じているからこそ、新たな関係性の場を求める妻有アートトリエンナーレの実現をみる事ができたと言ってもいいのではないと思われる。

このような現状認識のもとで、従来の「美術」や「学校」の制度性が作り上げてきた他者性の欠如ともいえるモノロギ的な在り方を解きほぐしていくために、シンポジウム『芸術の行為と新たなく知>』が企画されたのである。そして、作家、認知科学、社会科学のそれぞれから、現在の先端的なしかも代表的ともいえる方たちを招いて行われるディスカッションは、これまでにないシナジー効果が期待できるものとなった。

シンポジストの上野直樹氏は、従来の認知科学が、個人の頭の中でできあがる知識構造や枠組みを問題にしていたのに対して、認知とはそのように一方向的に閉じられたものではなく、私たちの行為に伴う他者や環境は、お互いが相互的な関係を作り合っているとした状況的な認知を問題にしている。このように諸関係の相互性に着目したとき、私たちのさまざまな行為は、お互いがお互いの環境に移動し合うことによって、むしろ不断に、社会や文化を作り替えている可能性に満ちていることになるといえる。

同じくシンポジストの山田富秋氏は、エスノメソドロジの立場から、より先鋭的に日常の常識の問題に迫っている。偏見や差別を生み出すとされる支配的文化的権力作用は、じつは私たちの日常的な協働的实践において知らぬ間に再生産されているという。このことは極めて気づきにくいことである。さらに、常識が生み出す安定した世界は、たった一人であっても間主観的な「社会的



世界」をでっちあげることができる」と言い、私たち一人一人は、そのような常識に対する深い信頼によって、じつは狭隘なモノログの世界に閉じこめられていると指摘している。

川俣正氏の作品行為は、このようなお二人の研究と大きく関連していると思われる。都市や社会を焦点化、可視化するためのテクノロジーや道具(アーティファクト)に対して、異物のように侵入し、協働的な参加を促す川俣氏の制作行為は、人々の社会的関係それ自体の組み替えや再建設をも視野に入れているかのように感じられるからである。

以上のようなそれぞれの仕事をつなげてみたいという思惑から、今回のシンポジウムの企図が立ち上がってきたのであるが、これまでの本学会の実践的な研究活動のまさに中枢の部分明らかにしていただけることを期待し、松之山町での開催を迎えることとなった。

II 開催次第及び内容

以下、当日のプログラム及び内容を報告する。

■第5回「美術教育実践学会」研究発表大会

期日：平成12年7月8日(土)、9日(日)

会場：新潟県東頸城郡松之山町

「自然休養村管理センター」

■一日目(7月8日)

1 研究発表Ⅰ 11:00~11:25

「陶芸・作家・研究機関の現状と課題」

戸出雅彦(金沢卯辰山工芸工房)

研究発表Ⅱ 11:30~11:55

「個々の表現世界の相互作用による子どもの意味生成活動」

北澤 晃(長野県高山村立高山小学校)

研究発表Ⅲ 12:00~12:25

「ものづくり・自分づくり」

石川清春(新潟県上越市立城北中学校)

2 総会 13:30~14:30

3 シンポジウム 15:00~18:00

テーマ 『芸術の行と新たな知』

基調講演 川俣 正(東京芸術大学)

シンポジスト 上野直樹(国立教育研究所)

シンポジスト 山田富秋(京都精華大学)

コーディネーター 松本健義(上越教育大学)

4 懇親会 19:00~20:00

■ 二日目(7月9日、午前中)

川俣正制作現場ボランティア

妻有アートトリエンナーレ制作現場見学ツアー

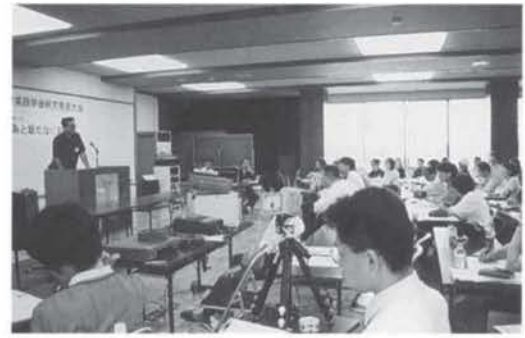
■ 参加者：一日目109名、二日目42名

二日間とも天候にも恵まれ、知的興奮に包まれた充実した大会が行われた。とくに懇親会の熱気は、松之山温泉のホテルに帰ってからもますます盛り上がりを見せ、忘れたくない交流の場となった。

また、今回は妻有トリエンナーレとリンクしたこともあって、外部からの参加者も多く、地元の方々やトリエンナーレ関係者、さらには東京芸術大学先端芸術表現科の学生なども含めて、広く問題を共有できたことは学会としての社会的役割を果たすことができた。

3件の研究発表も問題提起的な内容を含み、活発な議論が展開された。

戸出雅彦氏は、陶芸作家として活動しながら、「金沢卯辰山工芸工房」での研究と同時に、教育普及活動にも従事しており、その教育・研究機関としての現状と課題について報告があった。伝統工芸の町における開かれた工芸教育の在り方について、その社会的関わり的重要性



など、工芸の制度性をめぐって自らの変容を通じた切実な発表であった。

北澤晃氏は、現在の多くの小学校にみられる教育目標として他者への思いやりや協力をあげているが、その内実は、他者よりも先立った実体的な自己像があくまで前提であり、そのような認識では本当の子ども同志の相互行為を見いだすことはできないと問題を提起し、具体的な実践例から相互行為分析を行い、子どもの意味生成活動の精緻な理論とその実際を語った。

石川清春氏は、現在の中学校を中心とした子どもと教師を取り巻く錯綜した問題を整理したうえで、具体的に授業の実践例をあげて発表を行った。その核心部分は、大人の側が受け止める子どもの「つまづき」が、じつは「ずれ」の連続であり「意味づくり」の連続であるとしたことにある。ものづくりと自分づくりについての説得力ある提示が行われた。

以上、シンポジウムに先立ち、本学会の現在の成果と水準を示す発表が続いた。あらためて、これまでの研究会から学会にいたる活動を振り返りつつ、私事で恐縮ながら感慨深いものがあった。

研究発表の後、午後から総会が行われ、平成11年度事業報告、同じく会計報告ならびに監査報告、学会誌報告が行われ、承認された。

引き続いて平成12年度役員案、事業計画案、学会誌発行計画案、予算案について各担当者から説明があり、質疑応答の後、承認された。

なお、山ノ下堅一理事長の挨拶の中で、教員養成大学の在り方も含め、今日の教育の非常に厳しい状況が強調され、一刻も早い臨床的な実践学の構築が求められていることに鑑み、本学会の研究内容の重要性が確認された。

Ⅲ シンポジウム概要「芸術の行為と新たなく知>」

シンポジウムの詳細な記録は、『美と育』別刷りで発

行する予定であるので、ここでは、その概略を恣意的な読み取りをお許しいただいて、報告することとする。

まず、川俣正氏による基調講演として、約1時間、これまでの20年間にわたる制作過程とそのコンセプトについて、スライドによる解説が行われた。

以下、なぜ共同作業なのかに焦点化して、極めて部分的ではあるがその内容に触れてみたい。

おもに木材の廃材などを用いて、さまざまな建物の内側や、あるいは外側に、共同作業によって組み立てられる異物のごときインストールで世界的に知られる氏の作品(=行為)は、これまでの美術作品の完結した在り方に強い衝撃を与えた。そこには、これまでの近代的な考え方を越え出るボーダーがみとれる。それは、自分の内面的な感情の発露という言い方によく現れているように、自己の内面の表出、あるいは表象としての完結した作品の在り方に対してである。

「学生時代から、アトリエで絵を描くこと以上にアトリエ自体の意味であるとか、絵を描く行為そのものを考えてみたいと思い、行為性の方に興味に移っていった。…それは一方では外的な状況によって、どんどん変わっていく自分があったからだ。そのように変わっていく自分というものに、なおかつどこかで自分というものがあるとしたら、それはその場であったり、その状況であったり、そのようなファクターによって成り立つものではないのか。」

このように、共同作業に関心が移っていった動機を述べるくだりは、まさに<私>の成り立ちの深奥を見るようでもある。さらに、「朝から晩まで描いていることは、ほとんど自閉症だなあと思った…やっぱり何か関係を持ちたい…このままでは自分が枯れてしまう…自分で全部やっちゃいけないなと思った。自分で全部完結してしまうというのは、多分違う。」

実体化した自己像への懐疑である。そして、関係の中に投げ出されたときこそ膨らんでくるものがあるとい



う。解体しつつ、その一方で組み立てていくような、非常に不完全な共同作業はインタラクティブな「あいだ」を生み出し、それが人々のコミュニケーションを可能にする。むしろ、アーティストからコーディネーターに移ることであり、同時に観客の在り方の大きな変化を問かけるものであった。

次に、山田富秋氏からは、川俣氏の作品から触発されたことを中心に、コミュニケーションにまつわる常識の陥穽について以下の発言があった。

川俣氏の作品は、ただ見るだけではその作品を理解することにはならない。見るためには参加しなくてはならないところが非常に面白い。私たちが普段何気なく分かってしまっているとか、当たり前と思っている常識的なことに対する大きな挑戦に思える。

現代の課題はいったい何かというと、それはコミュニケーションの不可能性から出発することだ。私たちは常識というものをうまく使えるが故に、その見方に閉じこめられてしまう。たとえば、アンケート調査に出てくるような統計的な振る舞いが科学的で正しいと錯覚してしまったり、カフカの「掟の門」に出てくる常識に縛られた男のように、独自性を失い、その結果何もできずに終わってしまう喜悲劇のようなものだ。さらに、コミュニケーションがいつでもどこでも対等で可能だという前提は、コミュニケーションが通じない相手を最初から抹殺してしまう危険がある。

川俣作品のように、実際自分がやってみる、そのことによって実は初めて現実が動くのではないか。たとえばバフチンのいう「責任の構築学」とは応答責任のことであって、みんなが同じような常識に従っている限りは、自分の言葉に対しては責任を持ってない。自分から発した説明ではないからだ。現代の権力は、このように同じ見方に従うところから生じてくる。むしろ、何が起こるか分からない共同作業の場は、常識や政治的な呪縛から開放される一つの実践と捉えられる。

続いて、上野直樹氏は、パソコン形成史の事例をもとに、デザイナーとユーザーの区分が曖昧となり、相互的な関係の中におかれた参加デザインから両者の関係が再編されてきたことに触れ、固定的ユーザーやオーディエンスを批判する中で川俣作品の新たな関係性を論じるものであった。上野氏によれば、IBMの大型コンピュータの時代は、専門家と素人の区別が明確であった。ところがパソコンの登場によって、消費者とかカスタマーとは違ったカテゴリーとしてユーザー（使う人々）という概念が現れ、アーティファクトとユーザーが相互的に構成されるインターフェイスなる「あいだ」が問題になってきたという。参加デザインによって初めてアイデアが生まれ、プロトタイプをその場で柔軟に作り替えるような形に関係が変わってきたのである。一方、逆に参加させないデザイン、いわゆる情報教育にみられるようなコンピュータリテラシーの教育は、技術や知識がすでに固定的に存在していて、それを学ぶという在り方はむしろパソコン文化的ではない。その証拠に、情報処理試験の資格があってもかえって仕事ができないと言われるように、今や参加可能なツールや場をつくるのが課題となっている。

その後フロアを交えたディスカッションに移り、参加することによる他者性の現れを中心に論議が深まった。

まとめとして、科学的な統計調査といわれるものは相互行為をしなくてもすむ方法であり、自分一人で細々とやれるディスコミュニケーション＝無世界性に通じるとし、対象である相手と全く関わらない在り方に疑問が呈された。その無世界性を打破する行為としてフィールドワークなどの共同作業があげられ、自分の立場と同時に相手の立場もずらしながら、新しい予想もできない関係が生まれること、そこに常識に縛られた判断力喪失者から逃れ、真の対話的なものの可能性がみられることを結論として、シンポジウムが終了した。

まさに、アートと教育の共通課題が現れたといえよう。